

九州天皇家論 3章 神武東征

九州天皇家の誕生

“蜻蛉のとなめ”は竹馬川

三十有一年の夏四月乙酉の朔に、皇興(すめらみこと)巡り幸(いでま)す。因りて腋上(わきがみ)の
嚙間丘(ほほまのおか)に登りまして、國の状(かたち)を廻(めぐ)らし望みて曰(のたま)はく、「奸哉
乎(あなにや)、國を獲つること。内木綿(うつゆふ)の真進き國(まさきくに)と雖も、蜻蛉(あきづ)の臀
舐(となめ)の如くにあるかな」とのたまふ。是に由りて、始めて秋津州の號(な)有り。昔、伊邪那岐命
この國を目(なづ)けて曰はく、「日本は浦安の國、細戈の千足(ちだ)る國、磯輪上(しわかみ)の秀真
國(ほつまくに)」とのたまひき。復(また)大己貴(おほあなむちの)大神、目(なづ)けて曰はく、「玉牆
(たまがき)の内つ國」とのたまひき。饒速日(にぎはやひ)命、天磐船に乗りて、太虚(おほそら)を翔
行(まぐりく)きて、是の郷(くに)を睨(おせ)りて降(あまくだ)りたまふに及到(いた)りて、故、因りて目
けて、「虚空見(そらみ)つ日本の國」と曰ふ。
(神武紀)

神武は、その31年に巡幸して、「腋上の丘」に登り、国見をしている。国見をしたのは「倭國(香春町)」のことではない。「皇興巡り幸す」と記述しているように、「倭國(香春町)」を出て、領国を巡幸したのである。国見をして神武は感想を述べている。

奸哉や、國を獲つること。内木綿の真さき國と雖も、蜻蛉の臀舐の如くにあるかな。

何故、神武は「蜻蛉(あきづ)の臀舐」と思ったのか。通常、奈良盆地を見てこのような感想を述べたと解釈されている。だが、この神武の感想について様々に疑問が出されている。一体、神武はどこから奈良盆地を見たのか。奈良盆地を「蜻蛉の舐め」と見ることができそうな山はどこか。葛城山の山頂から眼下に奈良盆地を見ても、そのような感想は持つことはできないし、生駒山頂から見ても、奈良盆地は「トンボの交尾」の姿には見えない。奈良盆地でトンボの交尾に見立てるような場所をいくら探しても徒労に終わるであろう。神武は奈良には足を踏み入れていない。神武の国見は奈良ではない。

神武の巡幸先は東征の激戦の勝利によって最初に手に入れた國である。故に、「國を獲つること」という感想をもったのである。神武が国見をした「腋上の丘」とはどの丘か。神武紀には有名な丘が登場する。「国見の丘」である。

冬十月の一日に、天皇、其の嚴笠(いつへ)の糧を嘗(たてまつ)りたまひ、兵を勒へて出でたまふ。先ず八十梟帥を國見丘に撃ちて、破り斬りつ。

神武の最強の敵、「八十梟帥」が陣を構えた丘が「国見丘」であった。ただ、この丘は、後年、神武が国見をしたことで、この名前となった。元々の名前は「国見の丘」ではない。この丘には三つの登山道があった。「女坂」「男坂」「墨坂」と云った。この丘の攻防が東征の成否を決めた重要な戦いであった。神武は10月、八十梟帥と戦い勝利していた。ところが、「倭國」には二人の八十梟帥(タケル)がいた。一人が「赤銅の八十梟帥」である。神武が10月に国見丘で破ったのはこの「赤銅の八十梟帥」であろう。続いて、11月に兄の「磯城八十梟帥」と戦う。兄の「磯城」も「国見の丘」に立て籠もり、容易に討つことができない。

「国見の丘」は小倉南区の城山

神武はその31年に国見をしている。神武の死亡年は127歳である。当時の暦は二倍暦だったと思われる。神武が東征に出発したのは、ほぼ23歳、「倭國(香春町)」に都を定めた3年後の26歳、国見をしたのがほぼ41歳となる。都を開いてから15年、その歳月に王朝は安定し、神武は当初の目的地であった「東に美き國」を巡幸することにした。そして、東征の成否がかかった激戦地であった「国見の丘」に登ったのであろう。若き東征の日々を偲び、激戦の丘に立って国見をした。神武は「国見の丘」から國の姿を見て、「秋津洲」と呼んでいる。東征で激戦であったのは小倉南区である。神武は国見をして、「蜻蛉の臀舐め如く」と言い、そこから「秋津州」の名がついたと伝える。では、神武が国見をしたのはどの丘か。「国見丘」に関する記述は二カ所ある。

9月5日、天皇、彼の菟田の高倉山の嶺(いただき)に陟(のぼ)りて城(くに)の中を膽(お)望りたまふ。時に、國見丘の上に則ち八十梟師(やそたける)有り。又女坂に女軍を置き、男坂に男軍を置く。墨坂に焮炭(おこしずみ)を置けり。其の女坂・男坂・墨坂の號(な)は、此に由りて起れり。

(日本書紀・神武天皇)

主な登山道は、二つ有る。それぞれに「女軍」「男軍」を配置している。もう一つ、登り道がある。だが、その道は正規の登山道というより、間道である。普通は使わない。故に「焼けた炭」を敷いて、通行を遮断している。坂の名前は軍の配置によって「女坂」「男坂」「墨坂」と呼ばれている。

椎根津彦がその攻略方法を神武に献策する。

時に椎根津彦、計りて曰さく、「今は先づ我が女軍を遣して、忍坂の道より出でむ。虜是を見て必ず鋭を盡して赴かむ。吾は勁(つよ)き卒を駈馳せて、直に墨坂を指して、菟田川の水を取りて、以って其の炭の火に灌きて、儻忽(にわか)の間に其の不意に出れば、則ち破れむこと必じ也」とまうす。天皇其の策を善(ほ)めて、乃ち女軍を出して以って臨しめたまふ。虜、大きな兵已に至ると謂(おも)ひて、力を畢し相待つ。是より先に、皇軍攻めて必ず取り、戦ひて必ず勝てり。而るに介胃(いくさ)の士、疲弊ゆること無きにあらず。故に、聊(いささか)に御謠をつくりて、以って將卒の心を慰めたまふ。謠して曰はく、

相並めて 伊那瑤の山の、木の間ゆも、い行きまもらひ、戦へば、我はや飢ぬ、鳴つ鳥、鶺鴒いが徒、今助けに来ね

果して男軍を以て墨坂を越えて、後より夾み撃ちて破りつ。其の梟帥(タケル)兄磯城等を斬りつ。

(日本書紀神武天皇)

「忍坂」とは「男坂」にあたるであろう。そこに「女軍」を向かわせて、敵に本隊が攻めてきたと思わせる。その隙に「墨坂」に敷き詰められている炭を菟田川の水で消して攻め上る。このような作戦を立てる。

「女坂」「男坂」と二つの登山道がある。もう一つの間道「墨坂」に近くには菟田川がある。「国見の丘」はこのような丘である。小倉南区でこのような場所を探してみよう。

まず、目につくのは「小倉カンツリー倶楽部」がある小高い丘である。絶好の位置にある。しかし、よく見ると、この丘には「大池」「迫池」「成就寺池」「扉ケ池」と池だらけである。菟田川の水で炭を消すといった作戦を立てる必要がない。水は池にたっぷりある。またこの丘は低すぎる。しかも侵入口は四方到る所にある。敵を防ぐに適した「要害の地」といった地形ではない。

別の場所を当ててみよう。小倉南区の長野川の上流に護念寺という寺がある。そのお寺の南の山が通称「城山(230m)」と呼ばれる丘である。護念寺の門に、長野城跡についての案内がある。この案内文を再掲しよう。

護念寺の南、通称城山(二百三十米)の頂上が城跡である。保元二年(一一五七年)に豊前の国司としてこの地に下向した平時盛の六男修理判官康盛が長野氏を名乗り、この城を築いたといわれる。その後城域も拡張され、今現存する城跡は、約四百年前の戦国時代末期の長野氏の居城として遺構が良く残っています。特に城台周辺の百数十条の連続堅濠(畝状阻害)は大規模かつ貴重な遺構で日本一だと称されています。

(護念寺)

この山は、誠に「国見の丘」としてふさわしい条件を備えている。山頂に登る道は二本ある。また、麓には川が流れている。その川は長野川である。川の水で炭の火を消すといった状況にびたりである。戦国時代、長野氏が城を築いているが、河内(小倉南区)を一望できるまさに要害の地である。長野城山は神武紀の「国見の丘」に関する記述をあらゆる点で満足させる。



(geocities.jp/kikunosato2005/sub7.html)

上の「長野城復元想像図」を基に考えてみよう。城に通じる道は二つある。その登山道を防いでいるのが「二

の丸」と「西丸」だと想定すればまさにぴったりである。西丸が護る登山道が主要な入り口とすれば、神武軍のおとりの「女軍」が配置されたのが西丸への道であろう。「墨坂」がどの坂を指すか明らかではないが、もう一本狭い登山道がどこかにある。「墨坂」の焼けた炭を消したのは麓を流れる川であろう。神武紀の「国見丘」とは標高230mの「長野城山」である。この丘が二人の「八十梟師」、「赤銅の八十梟師」と「兄磯城八十梟師」との激戦の丘であった。

「菟田川」とは、現在の長野川である。小倉南区長野が神武紀の「菟田」である。激戦の「国見丘」とは「長野城山」である。



蜻蛉の臀帖

神武が戦った「国見の丘」とは長野城山であった。だが、この丘は、本来、「腋上(わきがみ)の嚙間丘(ほほまのおか)」と呼ばれていたものであろう。神武はこの丘から「国見」をした。よって、それ以降「国見の丘」と呼ばれた。日本書紀は神武の故事を元に「国見の丘」と書いているのである。この239mの山からの眺望はどうであろうか。

HPの写真で拝見させていただきます。木が邪魔になっているが、眼下に広がるのは小倉南区の曾根平野と竹馬川の流れである。神武が見た情景はこの情景であった。「因りて腋上(わきがみ)の嚙間丘(ほほまのおか)に登りまして、國の状(かたち)を廻(めぐ)らし望みて」と日本書紀が書いた國の情景は小倉南区である。小倉南区の中央を竹馬川が曲がって流れている。神武はこの川の流れを見て、「蜻蛉の臀舐め」を連想したのである。竹馬川は誠に特徴ある流れをしている。とんぼが交尾している胴体の曲がり具合に似ている。

哉乎(あなにや)、國を獲(え)つること。内木綿の眞辻き國と雖も、蜻蛉の臀舐の如くあるかな。

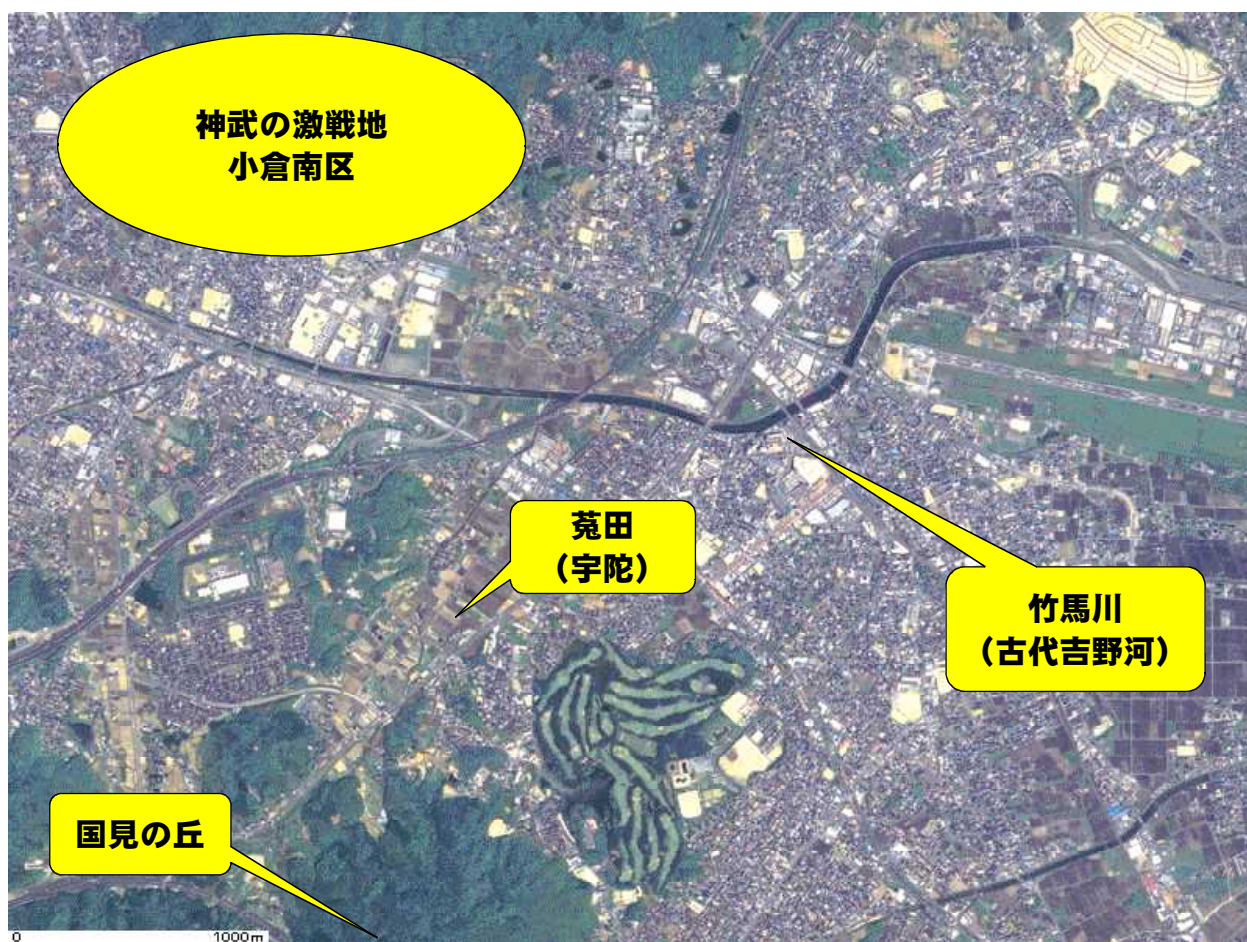
ああ、佳い國を手に入れたことだ。この國を木綿のように狭い國という者もいるが、こうして見ると、交尾する蜻蛉の臀にそっくりではないか。

神武は竹馬川の流れをこのように見たのである。



HP: nantomo.timna.sytes.net/clip4/newpage1.htm





歴代王朝の中心・小倉南区

神武が國見した「秋津島(小倉南区)」を伊弉諾尊、大国主命、饒速日がそれぞれ名前を付けて讃えている。

昔、伊弉諾尊、此の國を目づけて曰わく、「日本は浦安の國、細戈の千足る國、磯輪上の秀真國」とのたまひき。復大己貴大神、目けて曰はく、「玉垣の内つ國」とのたまひき。饒速日命、天磐船に乗りて、太虚を翔行きて、是の郷を睨りて降りたまふに及到りて、故、因りて目けて、「虚空見つ日本の國」と曰ふ。
(神武紀)

伊弉諾尊は「細戈の千足る國」と云う。「細戈の千足る國」とは「細戈が大量生産される國」という意味であろう。従って、その國は銅山がある国こそ相応しい。また、大己貴大神(大国主命)の亦の名は「八千矛神」である。青銅器分布図では「細戈の國」と言い得る地域は九州である。奈良は周知の如く銅鐸文明國である。

「浦安の國」とも言う。浦とは入江である。波の静かな入江という意味では、小倉南区はぴたりである。曾根の海は波が穏やかである。浦は入り江、港の意である。だが、浦を「心」と解釈されることもある。「うらがなしい」と云う、「うら」の意だと解釈される。そして「浦安」は「心が安らか」という意味に解釈する訳である。しかし「心が安らかな国」と云う解釈はいかにも現代風である。飛躍というべきであろう。

大己貴大神はこの国を「玉垣の内つ國」と云った。「美しい垣のような山々に取り囲まれている國」(日本書紀神武紀・頭注35)と讃えている。ここ小倉南区に立って周囲を見回すと、北に足立山系、西に貫山、南に水晶山系がある。ここは山々に囲まれた「内つ國」と云うにふさわしい。大国主命の表現もまた的確である。では何故、大己貴大神(大国主命)はこの国にいたのか。それはここ小倉南区が出雲王朝の都だったからである。

神武に先立つこれらの王の小倉南区に関する感想はきわめて普通である。小倉南区の地勢を正確に表現し

ている。これらの王の感想と比較してみると、神武の「トンボの交尾」という感想は異常も異常、尋常の感覚ではない。では、何故、神武だけがこのような超飛躍した感想を持ったのか。それを解く鍵はイザナギ「国生み」にある。神武は東征に出発する前、「安藝國」に居た。この「安藝(阿岐)」の國は伊邪那岐命國生みの「大倭豊秋津嶋」に存在した。神武はその「秋津嶋」に居た。

「大倭豊秋津嶋」の名前の由来

再び、國生みの嶋「大倭豊秋津嶋」について考えてみよう。神武は東征前に「阿岐國」に七年滞在していた。神武が滞在した「阿岐國」とは「大倭豊秋津嶋」にあった古代國である。神武の時代には「嶋」はもう陸続きになって「州」となっていたが、そのまま嶋であった当時の名前で「秋津嶋」と呼ばれていた。神武は「秋津」がトンボを意味することをよく知っていたにちがいない。そして、自らが征服した小倉南区を見て、かつて東征前、自分が滞在した「秋津嶋」を想起したのである。それが、「蜻蛉の臀帖の如く」である。

「秋津嶋」は「蜻蛉の臀帖の如く」と言うにふさわしい姿をした國だった。新しい「秋津嶋」と古い「秋津嶋」は双子のようによく似ていた。新旧二つの秋津嶋は相似形だった。常人には思いつかない神武の感想にはすでにその原型が存在したのである。

「蜻蛉の臀帖」と呼ばれた川は二つ

神武は小倉南区の竹馬川を見て「蜻蛉の臀帖の如くあるかな」と感想を述べた。神武の感想は竹馬川の流れに対するものだった。竹馬川の流れは特異な姿をしている。云われてみれば、確かにトンボの交尾する姿を連想させる。だが、それだけで神武はトンボの交尾を思いついたのではない。

神武は「大倭豊秋津嶋」に七年いた。神武が居た「安藝(阿岐)」とは「門司大積」である。この國はその名前の如く「秋津(トンボ)」の姿をしていた。小倉南区と門司大積は同じ國の姿をしていた。その象徴が川であった。門司大積にも「蜻蛉の臀帖の如く」流れる川が存在したのである。



「大倭豊秋津嶋(門司大積)」の「蜻蛉の臀帖」 奥畑川が初代「蜻蛉の臀帖」の川

門司区大積にも奥畑川という名の川が流れている。ご覧のように、奥畑川も特異な流れをしている。「蜻蛉の臀帖の如くあるかな」と感想をもっても当然な流れである。むしろ、こちらの方がトンボの交尾により似ている。



伊邪那岐命(イザナギ)が「国生み」をした時、この嶋(洲)は「大倭豊秋津嶋」と呼ばれていた。「秋津(とんぼ)」という名前の由来は奥畑川の流れである。伊邪那岐命の時代にはすでに門司大積は「秋津(蜻蛉)」という名前があった。

むしろ、神武がその名前をつけたのではない。神武は遙か祖先が「秋津(トンボ)嶋」と名前を付けた嶋の「阿岐國」に滞在していた。その時、神武は、何故、「秋津嶋」と呼ばれるのか、その由来を知ることとなった。その名前の由来は奥畑川の流れであった。人々は奥畑川の流れを、「トンボ(秋津)の交尾のようだ」と見ていたのである。

それ故、新しく支配下に置いた小倉南区の竹馬川の流れを長野城山から初めて見た時、「ああ、この川は我が祖、伊邪那岐命が國生みした秋津嶋の奥畑川と同じ流れをしている。この川もトンボが交尾する姿だ！」という感想を直ちに持ったのである。

神武にとってこの感想は異常なものではなかった。現在、私たちが、「蜻蛉の臀帖とは一体何だ?」「何をもってそう云うのか?」と、大騒ぎをするような特別な事でもなかったのである。とつきの昔に、祖先の伊邪那岐命が奥畑川を「トンボの交尾」の姿に見立てて、「大倭豊秋津嶋」と呼んでいた。神武は当時の人々全てが周知していた由来をもとに、竹馬川の感想を述べたに過ぎない。

私たちは、例えば、鳥取県の大山を「伯耆富士」と云う。この命名は誰でも知っている名峰富士を前提にしている。大山も美しい山である。その大山を見て「まるで富士山のように美しい山だ。これは伯耆の国の富士山

だ。」と云うのと同じように、神武は竹馬川を見た時、奥畑川の流れが自ずと思い起こされ、「蜻蛉の臀帖の如くあるかな」と云ったのである。神武にとってごくごく自然な感想であった。

伊邪那岐命が統合した「阿岐國」には「天(あま)王朝」歴代の宮が存在した。「多祁理宮」である。神武はここに大八洲統治の為、七年間滞在していた。「トンボの嶋」のいわれは奥畑川を実見してよくよく知っていたのである。

神武が云った「秋津島」と伊邪那岐命の「秋津嶋」は異なる国である。しかし、神武は小倉南区を流れる竹馬川を見て、「トンボが交尾している」という感想を持ち、故に、小倉南区を「秋津(トンボ)島」と云ったのである。伊邪那岐命の「秋津嶋」と國の名前が同じであるという理由は、それぞれの国によく似た流れの川があるからである。まるで交尾するトンボのように川が曲がって流れている。伊邪那岐命の「大倭豊秋津嶋」には奥畑川が流れ、神武の「秋津州」には竹馬川が流れている。

だが、現在で云えば、「阿岐國(門司大積)」は辺鄙な所である。なぜ、ここに、神武は何故、七年も滞在したのか。このような感想を持たれるかもしれない。また「国生み」においても、何故、ここに国を作ったのか。それほど重要な土地とは思われないではないか。このように考えられるかもしれない。

現在の姿を見ればそのような感想も当然かもしれない。しかし、近世までこの地は港として栄えていた。「大積」という名前は関門海峡の難波を避けてこの港から荷物を積んだからだと言う。(HP「北九州あれこれ」)

関門海峡は難しい海である。波が速い。それだけではない。東流し、また、西流する難しい海である。神武が「天(あま)王朝」の吉備(彦島西山町)から東征に出立した時、関門海峡は流れが速かった。神武は「浪が速い」と云った。是が訛って「浪速(難波)」となった。門司大積はこの関門海峡の難波を避けて、海上交通の要所として栄えてきた。多くの荷が集まり、大いに積んだ。門司大積は伊邪那岐命の昔より、周防灘を臨む良港として栄え、國の重要な位置にあったのである。

